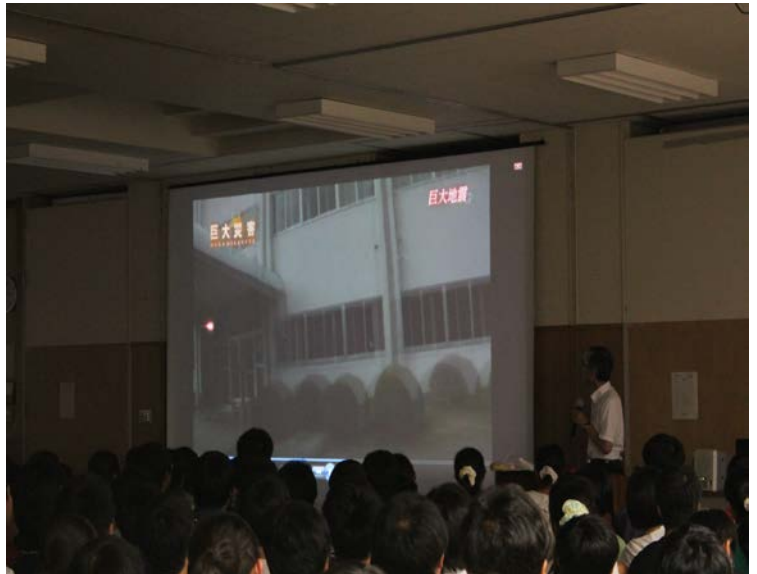


9月3日、70回生を対象に災害研究に向けての講演会がありました。講演をしていただいたのは、仙台大学教授で、震災当時石巻西高等学校の校長をされていた齋藤幸男先生でした。今回の講演のテーマは「災間を生きる君たちに～震災の教訓と教育の力～」。今後災害研究を進めていくうえで、こころに留めておくべきことや参考にすべきことが多くあったと感じた人は少なくないと思います。今回の講演を生かして、皆災害に対しての考え方を見直しましょう。

下記は、講演の概要です。



・ノルウェーのフィヨルド

東日本大震災の地震波は、地球の中心を通り、遠く離れたノルウェーまで20～30分で到達しました。

・震災がれき

海流でがれきが世界へ流れてしまいました。コアホウドリはプラスチックを飲んでしまい、そのことが死因につながってしまいました。

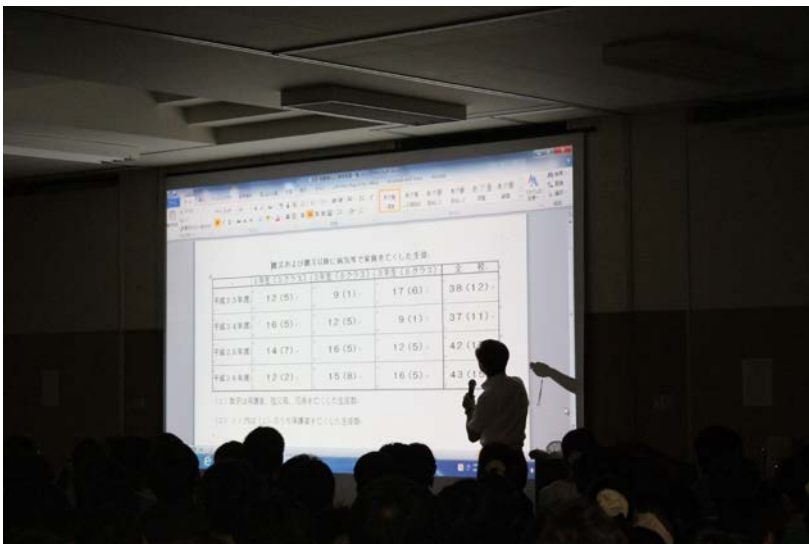
・大人の「経験値」

津波被害は大人の経験による予測をはるかに超えてしまい、多くの子どもたちが亡くなってしまいました。津波は時速70～80kmで押し寄せる、言わば「凶器」になるので、財産を残すことよりも、子供たちの将来に期待し、教育によって経験を託していくことが大切です。そして子供たちは、受け身になって大人の言うことを鵜呑みにするのではなく、自分の頭で考え、大人に素朴な質問をぶつけなければならないのです。

閉上地区で人口の約四分の一の人々が亡くなったのは、大人たちの貞山堀に対する信頼の「楽観バイアス」という心理が働き、避難行動を妨げたためでした。また、避難することが難しい高齢者などの他人を助けようとする愛他行動も見られました。

・震災後の支援

物資支援のほかにも、ASD（急性ストレス障害）やPTSD（身的外傷ストレス障害）になった人たちのための心のケアも行われました。歌声や笑い声が復興の力となりました。



【生徒の感想】

・防災講演会を聞いて、東日本大震災について知らないことが多くあったことに気付かせられました。「大人の豊富な経験が子供を災害から助けられるとは限らない」という言葉を聞いて、これからの生活が少し怖くなりました。しかし、きちんとした教育をしていくことの大切さも同時に考えることができて良かったです。

・地震波の威力、がれきの生物への影響等、地震の引き起こした地球への影響だけではなく、人間の心に引き起こした影響について深く考えさせられました。また、震災時の行動には、してしまう理由があるのだと初めて知りました。『生の声』が人に生きる勇気を与える」。この言葉を聞いた時、私にもこれからでも出来ることがあるのではないかと思います。とても考えさせられる講演会でした。

・日本で起きた地震の影響が遠くはなれたノルウェーのフィヨルドにまで及んだと知り、驚いた。津波対策の土手は高さだけが大切なのではないとわかった。教育というのは災害で被災を減らすために最も重要なことなのだと思う。震災が起きたとき、人間は心理状態によって生きるか死ぬかが決まるのだと強く感じた。

・災害研究と一言でいっても、災害のメカニズム・対策・人間の心理など、様々な観点から調べることができるのだと思った。また、映像や講演の方のお話より、大人の経験にたよりすぎるということはあまり良くはなく、まさかという事態に備えていろいろ考えることのできる柔軟な脳が大切だと思った。今回は数十分という短い時間で、全てを聞くことができなかつたがもっと聞いてみたいと思った。

・震災の被害として、火事や津波だけが特に注目されているのが現代の状況ではあるが、実際にはそれらの被害による違う面での被害が起きているということが分かった。また、齋藤先生は実際に経験したこともあり、特に、気持ちや覚悟などについても講演していた。やはり災害研究には表面だけの気持ちでは取り組めないのだと感じた。よって、きちんとした心構えで取り組み、また二次災害以降の被害についてもしっかり理解していきたいと思った。



↑石巻西高等学校の復興の象徴
全校製作モザイクアート



↑避難所運営時に着ていたジャージで語る齋藤先生

【編集後記】

震災から4年半が経過しました。今回の講演会で齋藤先生に熱意あるお話をさせていただき、皆さんも色々なことを感じ、考えたことと思います。災害研究は共通の興味をもつメンバーと一緒に研究を進めることになるので、グループ内で互いに刺激し合い、良い研究をしてほしいと思います。また、生物実習の反省を生かしてポスター作りや発表に取り組みしましょう。